

執筆を終えて

わたしは、『萩原朔太郎全集』やアカデミックな文学史家たちの評論集並びに書簡類を調査し、見え隠れする朔太郎の実像に迫ることができたことに、晴れ晴れとした気持ちになり、満足している。

何故ならば、これまでの著書の多くは、顕彰に基づく美談ばかりが目立ち、真実を描いた朔太郎像に接することがなかったからである。

政治や官僚の世界でも言えるのだが、公文書改ざん・統計不正問題などの与野党論争を見ると、与党・政府は野党の質問に対して真正面から答えようとせず、ご飯論法に出たことに、これが日本の民主主義なのかと、イライラとともに激しいショックを受けている。

主権者である国民から託された国会議員が党議に縛られて理性を失い、正しい行動ができないようでは、日本は自由や民主主義を土台とした自由民主主義国家なのかとの疑問がぬぐえない。と同時に、政治家としての個々の資質を問わざるを得ない。

政権与党の政治家が予算委員会などで、総理大臣に向かって、野党以上の迫力で堂々と正論を持って問えたならば、立派でありカッコいいと思うのであるが、謙譲語を使用して媚びる言いまわしの政治家には、うんざりであり、まことに困ったものである。

野党の質問にひたすらヤジを飛ばす真意は何なのか、恐ろしささえも感じる。それは、戦前・戦中の治安維持法に匹敵する日本の言論封鎖を、国会内で垣間見た気持ちになるからである。

米国の議会では、大統領の掲げる法案に反対する与党共和党議員さえおり、マスコミも政権に対して厳しい目で論評を加えている。日本は寄らば大樹であって、メディアを含めて民主主義は定着していないように思う。

福田赳夫氏は「政治家は最大の道德である」（『私の履歴書』日本経済新聞出版社）と言ったが、今の政治家は、簡単に嘘を言う。朔太郎の言う「ペテン師」なのか、改ざんや不正問題の解明に消極的である。従って、あれほど財政再建に取り組むと言いながら、消費税を増やした挙げ句、予算規模を百兆円超えに膨らまし、財政規律を無視している。しかも、景気の落ち込みを懸念してか、軽減税率を導入するとのことであるが、今の日本のやるべきことは、バラマキではなく、その分を手厚く社会保障に充当すべきである。

福田赳夫氏は、自民党の政調会長を更迭されても、池田内閣の高度経済成長路線を批判した政治家であるが、高度経済成長戦略の反動によって起きた昭和49年最大の危機であったインフレと不況を、「わたしがやらないで誰がやる」と言い、全治3年と言いきって完治させた。もし、生きていたならば、今の有言不実行な政治を何と嘆くであろう。

国家財政を今の財務大臣に任せたままで、将来にわたる年金などの社会保障は大丈夫なのか不安が募る。いずれは、財政赤字を膨らました張本人として、後年になって必ずや責任を問われるはずである。

すでに、社会保障制度が危機的な状態にあることや、国家財政も悪化しており、一般の国民は将来の不安を抱えて生きている。低所得者は生活苦に悩み、家庭内外で多くの悲惨な事

件が発生している。この状況を一日も早く解消し、不安の少ない社会になるよう政治家たる者は努める使命と責任がある。

拉致された家族は正月もなく一日も早く戻って来るのを祈っているにもかかわらず、言葉巧みに先送りし、ゴルフで鋭気を養っている安倍総理大臣をテレビ報道で視聴したとき、やはり、福田氏を思い浮かべるのである。彼は、「さあ働こう内閣」と号し、掃除大臣と称すなど、ゴルフどころか風呂にも入らなかったことを、群馬テレビで語ったのを筆者は記憶している。

総理大臣たる者は、一日たりとも、政治から離れるべきではないと思う。近々の課題である社会保障改革にメドもつけないまま、長期政権であり続けることに不快感を抱く国民は多いはずである。

特に低所得にあえぐ人たちは、将来の不安を抱えながらも国民年金を掛けられない状況にあり、いずれは、無年金者として生活保護を受けなくてはならない予備軍と想定されている。そんななかで、国家を司る政治家たちが、膨大な歳費を使って長期間の海外視察（バカンス）に出る不条理は許されず、視察に行きたいのであれば、身を切る改革をすすめる意味からも、支持者の献金あるいは私費によって賄うべきであろう。

少子化対策も展望が開かれておらず、原発においても汚染ゴミ処理や廃炉に膨大なコストがかかることなどを考慮したならば、再稼働を推す政治家を選ぶ国民にも一端の責任があるということになる。

人間は十人十色であり、考えや見方は違う。難しいことではあるが、一つの物差しとしては、国民に寄り添った行動をしているかどうかを判断基準とすべきである。

政治家の歳費（賃金）では到底賄えない豪邸を建てて住み、会議と称して政治資金で高級料亭通いをするなど、姑息な政治家たちは、現役時代に私腹を肥やし、将来の不安を解消すべく、自らのために行動しているのである。週刊誌で問題となった某・元東京都知事をなぞれば明らかであろう。

国民一人ひとりに向き合い、心を砕く政治家がどれほどいるかといえば、一握りかも知れない。わたしが朔太郎について述べたのも、一握りの人の思いを述べたに過ぎないのかも知れない。しかし、一石を投じることで拡散し、波紋が広がるものと考えている。

地元のマスコミや団体、前橋市の広報誌などが媒介となり、詩人・朔太郎の偉人伝説が広がり、浸透している。しかし、地元マスコミや市広報誌などは、本書で示した破廉恥な生活や行動には一切触れていない。触れたならば、偉人伝説は違ったものとなるからである。

なお、前橋文学館内3階フロアで展示された「月に吠えらんねえ」というコミックが、ネット上で若い女性たちに人気を博したようである。

文学館として、一人でも多くの入館者を期待し、創作漫画を展示したと思われるが、くまモンやぐんまちゃんなどのマスコットキャラクターならば許されるであろうが、館の使命として考えた場合、朔太郎という詩人のイメージを変える企画は避けるべきである。

いずれにせよ冒頭で述べたが、本書を執筆したことで一つの思いが吹っ切れ、晴れ晴れとした気分には変わりはない。このような評論を取り上げ、ていねいな本づくりをしてくださったあけび書房の久保則之代表には感謝申し上げたい。

2019年6月30日

大野 富次